	<h1 style="color: blue;">曾祖父の日清・日露戦争</h1> <h2 style="color: blue;">SCE・Net 神田 稔久</h2>	<p>E-91</p> <p>発行日 2016.11.10</p>
---	---	---------------------------------------

義父が亡くなった時に遺品を整理している中で、妻の曾祖父の軍隊手帳を見つけました。ぱらぱらとページを繰っていると、曾祖父が日清・日露の両戦争に関係していたことが分かりました。

軍隊手帳の記述を基に、関連する事柄を付記して紹介させていただきます。

### 1. 曾祖父のこと

明治8年7月31日、千葉県で出生。身長は、五尺五寸三分（167.6cm）で、当時の徴兵の基準が五尺（151.5cm）であったことを考えるとかなりの長身でした。

### 2. 軍隊手帳

軍隊手帳は軍人が所持する手帳のことで、軍人としての身分証明書と履歴書を兼ねたものです。

旧日本軍の軍隊手帳の中には、所属部隊の証明印影・軍人勅諭・教育勅語・軍人読法・経歴等が記されています。

### 3. 軍隊での略歴

最初の徴兵は、明治28年12月から31年11月までの3年間で、第一師団歩兵第二連隊（佐倉が本部）に所属していました。その間に、日清戦争終結後の中国山東省威海衛（旧清国北洋艦隊の基地）の守備のため、明治26年から約1年間現地に駐留しています。

続く日露戦争では予備役として明治37年6月に召集を受け、同月末に遼東半島塩大壩に上陸し、以降明治39年1月の凱旋まで中国東北において戦闘に参加しました。

その後、日露戦争の功により功七級金鷄勲章並びに年金100円、勲八等白色桐葉章および戦後従軍記章を授典されています。

4、5では、軍歴の欄に、軍隊手帳の記録をそのまま紹介させていただきます。（一部省略、また不明な点はそのまま記載してあります。）

#### 4. 日清戦争後の中国駐留

年 月	軍 歴	関連事項
明治 28 年 4 月		三国干渉により遼東半島還付
明治 28 年 12 月	歩兵として歩兵第二連隊に入隊	
明治 29 年 5 月	清国山東省威海衛占領軍交代のため 5 月 26 日佐倉出発	
明治 29 年 5 月	6 月 4 日威海衛駐屯地塞子村着 器械演操二等、銃剣術二等、射撃三等	
明治 30 年 5 月	同年 5 月 24 日占領軍交代を了し威海衛湾乗船 同月 29 日横浜港着、同月 30 日東京駅着	
明治 30 年 6 月	6 月 12 日一求卒 6 月 2 日より 7 日間威海衛占領軍慰労休暇	
明治 31 年 9 月	31 年度器械演操二等、銃剣術三等、射撃一等	
明治 31 年 11 月	11 月 30 日現役満期除隊	

中国出張の日々については、軍隊手帳には特別の記録は残されていません。従って、初めての外国体験が、曾祖父の目や心にどう映ったかは全く分かりません。

中国出張後は、関東各地での頻繁な（2～3か月に一度の）演習のことが記録されています。

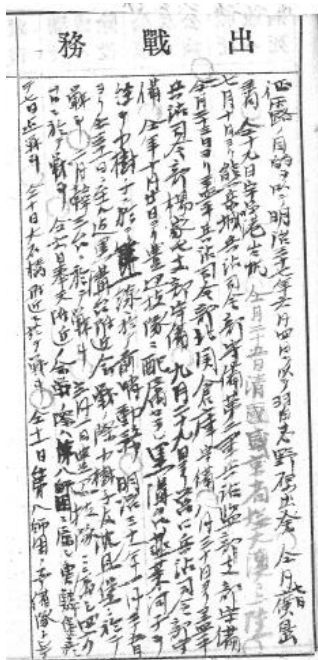
また、定期的に軍人としての力量の試験があり、成績が付けられていたことも分かります。

#### 5. 日露戦争での戦闘

年 月	軍 歴	関連事項
明治 37 年 2 月		宣戦布告
明治 37 年 6 月	征露の目的を以って明治 37 年 6 月 4 日を以って習志野原出発 同月 7 日広島着、同月 19 日宇品港出航、同月 25 日清国盛況省塩大塹に上陸	
明治 37 年 7 月	7 月 10 日より熊岳城兵站司令部守備第二軍兵隊監二部守備 同月 23 日より二十四軍兵站司令部北関倉庫守備	

明治 37 年 8 月	8 月 30 日より二十四軍兵站司令部揚家屯支部守備	旅順第一次総攻撃
明治 37 年 9 月	9 月 29 日より営口兵站司令部守備	
明治 37 年 10 月	同年 10 月 20 日より豊田支隊に配属せられ黒溝台燕菜？河子を経て小樹子にて第一線に於いて前哨勤務	旅順第二次総攻撃
明治 38 年 1 月	明治 38 年 1 月 25 日より同 31 日に至るまで黒溝台会戦の際小樹子及沈且堡に於いて戦闘	旅順開城
明治 38 年 2 月	2 月韓三台に於いて戦闘	
明治 38 年 3 月	3 月 1 日豊田支隊に属し四方台に於いて戦闘 同 6 日奉天付近の会戦の際は第八師団に属し魚燐堡嘉で 7 日まで戦闘 同 10 日大石橋付近に於いて戦闘 同 11 日第八師団の予備隊として敵を奉天北方に追撃 同 12 日也汁牛泉に至り滞在 同 17 日奉天停車場付近に至り滞在	
明治 38 年 4 月	4 月 1 日仮家堡に至り滞在 4 月 29 日同地出発	
明治 38 年 5 月	5 月 21 日平安堡着兵站守備	日本海海戦(5 月 27 日)
明治 38 年 6 月	6 月 1 日高台子着兵站守備	露西亞講和勸告受諾
明治 38 年 11 月	11 月 2 日歩兵上等兵拝命 11 月 5 日同地出発 11 月 7 日六社着同地守備	
明治 39 年 1 月	凱旋の為明治 39 年 1 月 14 日鉄嶺乗車 同月 17 日大連出航 1 月 21 日宇品港上陸 1 月 26 日広島出発 1 月 29 日佐倉着	
明治 39 年 2 月	2 月 4 日復員下命召集解除	

これらの記述は、手帳の中でも「出戦務」という特別の項目に記載されていません。



前回は日清戦争後の応召だったので軍隊手帳の記述にも緊張感は感じられませんでした。さすがに今回は戦争中ということもあり、召集時の記述からも切迫した様子が伺えます。(注参照)

中国上陸後は、暫くは守備の仕事をしていましたが、7カ月後からは、最前線での戦闘に参加するようになります。ことに奉天(瀋陽)占領までは、激戦が続いた様子が軍隊手帳の記録からも良く分かります。

そして、晴れて凱旋となりますが、さて故郷の千葉ではどのような式典があったのでしょうか?高官に対しては、新設の東京駅での凱旋式が行われましたが、一兵卒は、ひっそりとした帰国だったのかも知れません。

## 6. 後記

曾祖父の軍隊手帳では、日露戦争時においても華々しい戦果の記録は無く、転戦の様子が淡々と記録されているだけですが、その時まさに日本の命運をかけた戦い—陸では、旅順での203高地の戦い・曾祖父が参加した奉天(瀋陽)を巡る戦い、海では日本海海戦—が行なわれていました。

その時の、曾祖父の気持ちは軍隊手帳からは窺い知ることは出来ませんが、一兵卒として、命令の通りに忠実に戦っていたように思います。戦いへの悲壮感や高揚感あるいは恐怖感、どうだったのでしょうか?今となっては、知るすべは何も残っていません。

司馬遼太郎の描く「坂の上の雲」とは異なる視点からの戦争の記録を紹介させて頂きました。

注

日清戦争時は徴兵対象者の39%が戦争のために召集されただけでしたが、日露戦争時は、30歳近い予備役を招集せざるを得ないほどの総力戦であったことが分かります。